第３２０回くらしの植物苑観察会　令和８年４月２５日（土）

「『櫻草作傳法』を読む－栽培法を中心に－」

水田　大輝　　日本大学生物資源科学部

『櫻草（さくらそう） 作傳法（さでんぽう）』（旧字体の「櫻」と「傳」は、以降、新字体の「桜」と「伝」で表記）は、著者不明で作成年代もよく分かっていない写本ですが、文化年間（1804～1818）までを中心に江戸における**桜草に関わる歴史や品種、栽培法や鑑賞方法（飾り方）などが詳細に記されている桜草の解説書**です。前回は桜草連（同好会）を中心に紹介しましたが、今回は約 200 年前の栽培技術（情報）について紹介します。なお、写本中の尺貫法による寸法や旧暦の時期については、現代の単位（cm）や新暦に換算して表記しています。

桜草の植え方（年間の管理）

人それぞれのし慣れたやり方で工夫しながらの栽培が良い旨を前置きしたうえで、著者の栽培法を一例として以下のように紹介しています。

＜春の植え替えと芽出し＞　立春から二十日ほど過ぎた頃、天候を見定め植え替えを行う。鉢底に貝殻やごろ土で水はけを整え、肥えた土に芽を置き、その上に養分のない土を 2 cm ほど被せる。深すぎると花が抜けず、浅すぎると茎が伸びないため、この厚みが肝心。植え付け後は筵（むしろ）をかけ、土が乾けば根を傷めぬよう昼頃までに水をやる。彼岸前に芽が 2 cm ほど伸びていれば、筵を取り除く。

＜開花と花後の手入れ＞　三月下旬から蕾が見え始め、八十八夜（五月初旬）頃に花の最盛期を迎える。花が終われば、来年の芽を肥やすために葉を寄せ結わえて「増土」を施す。土の乾燥が強ければ、葉にかからないよう朝昼夕いつでも水を与えて、根が露出しないよう管理する。

＜採種と夏の入り口＞　六月の夏至の頃には種子が弾けるため、雨による飛散に注意して採種する。この時期は暑さや雨で葉が痛み始めるが、力のある芽では小葉が出てくることもある（「後さつ」と呼ばれる）ものの翌年の支障にはならない。長雨で上土が薄くなると葉が出やすいため、こまめに土を足して芽を保護する。

＜夏越しの肝要＞　七、八月の大暑は最大の難所。「夏の手当て専一」と心得、絶対に鉢を乾かさないようにする。夏に乾かしすぎると、秋の長雨で根腐れを起こし、冬に芽が傷む。そうなれば翌春には根がボロボロになって役立たず、最後には腐って消える。桜草は寒さに強く、暑さで弱るので、夏の管理を十分にすること。

＜秋から冬の管理＞　十月中旬、鉢に薄い水肥を施せば、来春には格別に強く大きな芽が育つ。十一月末の霜が降りる頃には、筵や菰（こも）をかけて防寒する。冬の乾燥が激しい時は数回水を与えるが、雪はそのまま覆いにしても良い。なお、十一月末に植え替えておくと春の開花が早まり、春植えにすれば花が遅く上がる性質がある。

春の植え付け方

芽の植え付け方についても詳しく紹介しており、以下のように述べています。

＜鉢への植え付けと見栄え＞　花天秤（花梗）が長く大輪のものは、大孫半土鉢（第 1 図）に二芽植えとし、小輪で花首の短いものは三芽植えにすると見栄えがよろしい。二、三芽植えでは花茎の長さが揃うよう調整が必要で、理想は同じ大きさ・根張りの「**親芽**」を揃えること。しかし、見た目が同じでも隠れた傷みや「**枝芽**」の混在で生育が揃わないことがある。枝芽は親芽より劣るため、親芽の根を 4.5 cm、枝芽を 6 cm 残

第 1 図．孫半土鉢（個人蔵）
※ピンク色のボールペンは、長さ 14.5cm.

して切り捨てるなど、根の長さを加減して花茎の高さを揃える。この「根加減」は経験を積み、芽の強弱を見極めて会得すべき伝達しがたい技であるが、自然と分かるようになる。
＜芽の性質と整理＞　品種により、巨大な親芽より中芽・小芽の方がよく咲く性質のものもある。一般に「親芽」が第一だが、枝芽が大きくても親芽の中芽程度と見なすべきである。逆に親芽は小さくとも案外見事に咲くことがある。また、親芽・枝芽の根元に余分な小芽があれば、勢いを分散せぬようかき取ること。
＜根切りと「白産根」＞　根をどれほど切るかは人それぞれで、全く切らない人もいれば、3 cm あるいは 1.5 cm 残して切り詰める人もいる。他人の真似で失敗するより、自分が栽培する場所に合ったやり方を見つけるのが一番である。著者が小日向（東京都文京区）で長年培った手法は、芽の状態に応じ根を 3〜4 cm 残して切り捨てるやり方。これは、その年に新しく出る「白産根（細根)」の力だけで花を咲かせるという考え方に基づいている。
＜品種ごとの植え方の工夫＞　よく伸びる品種は芽先を少し寝かせ、根を短く切って浅めに植える。逆に伸びにくい品種は根を長めに残し、深めに植えて芽先を上向きに立てる。なお、著者の家では十一月植えは開花が遅く、春植えの方が早く咲く傾向にある。また、冬（秋）植えは春の芽生えが揃わず、姿が乱れやすいようである。

用土の調整

『桜草作伝法』における用土・肥料の調整と扱いは、現代の有機栽培にも通じる合理的なもので、抜粋して以下に紹介します。
＜溜土（ためつち）の作り方＞　下水近くに溜（ため）を作り、土とともに米のとぎ汁、風呂の湯、魚の洗い水、下肥の上水を入れ、時々棒でかき回して 3〜4 ヶ月腐らせる。これを取り出して天日で乾かし、ふるいにかけて雨の当たらない場所に保存。この工程を繰り返すことで、極めて肥えた良質な用土ができあがる。
＜有機肥料の作り方と活用＞　**干魚・田作**：水に浸して天日で 2 週間ほど発酵させた腐汁を土に染み込ませ、乾燥させて用土にする。また、細かく刻んだ干魚に少量の米ぬかを混ぜ、鉢の底土にする簡便な方法は、著者の工夫。**蕎麦の出しがら・下肥**：蕎麦屋の煮出しがらを混ぜると土が柔らかく肥える。下肥は半年以上腐らせてから土に練り込み、雨の当たらない場所で保管して使用する。
＜落ち葉を用いた土作り（腐葉土）＞　高台などの土地では、秋に 1.8 m ほどの穴に落ち葉、土、下肥を層にして埋め、翌春に掘り出すことで非常に柔らかい良質な土（腐葉土）が得られる。これは巣鴨（東京都豊島区）辺りの植木屋も多用する手法だが、土地の低いところではできない。

以上のように、芽の植え付け方をはじめとする年間の栽培管理や土作りなど、様々な工夫と知恵により、約 200 年前には高い技術で桜草の栽培が行われていたことが窺えます。

参考文献：浪華さくらそう会誌版＜平成 2（1990）年度＞第 25 号　特集：櫻草作傳法　影印・翻刻・現代語訳

・・

次回予告　第３２１回くらしの植物苑観察会　令和８年５月２２日（金）

※平日開催となります。ご注意ください。

「お寺発のお茶づくり―寺院と茶園の中世史―」

小野塚　航一（当館研究部　特任准教授）

１３：３０〜１５：３０　　くらしの植物苑　東屋　申込不要